



セサル・トマス
・トウイ

活動：

国立芸術大学日本
研究講座長

居合道の先生

画家

セサル・トマス・トウイさんへのインタビュー

セサル・トマス・トウイ先生は、キューバ国立芸術大学 (ISA) の日本研究講座長を務めており、居合道を教えているほか、合気道、剣道、柔道なども心得ています。居合道においては、無雙直傳英信流居合術(むそうじきでんえいしんりゅういあいじゅつ)高明塾のキューバ支部長として、20年近くキューバ居合道の代表を務めてきましたが、2017年に支部長の役職を弟子に譲り、今は、大学の日本研究講座はじめ、2016年から務める国際水彩画協会のキューバ代表としての責務を果たしながら、自身のアーティストとしてのキャリアにも専念しています。

日本文化との出会い

在キューバ日本国大使館やその他の団体が主催する日本文化に関するイベントには、必ずといっていいほどトウイ先生がいます。まっすぐな姿勢、細いながらもがっしりとした体格、真剣でいて笑うととても優しい顔、そしていつも凜とした空気に包まれている、それがトウイ先生です。彼を知らない日本人は、武道家か、あるいはアフリカ系キューバ人の顔を持ちながら、時と場所を間違えた侍を想像するかもしれません。

トウイ先生と日本文化との初めての出会いは空手をやっていた叔父さんでした。叔父さんはトウイ先生にも、空手を教えてくれたそうです。そのため、近所の友だちが柔道を始めたときに自分もやってみようと思ったのは、当然の成り行きでした。柔道をとおして、道場の規律、先生への尊敬の念、そして日本語を少し学びました。その後は武道から離れますが、大学1年生のとき、合気道を見たことをきっかけに再び武道の世界に足を踏み入れます。「私は、武士の世界、その倫理、哲学、戦闘術、つまり武士道にぞっこんになりました。」と目を輝かせて語ります。約12年間、合気道と剣道を交互に練習し、その後、剣道に集中するようになりました。その間にも日本武道における刀の重要性、特に真剣（本物の刀）に興味を持ち、その使い方を学ぶべく、居合道にたどり着きました。また、武道と深いかかわりのある仏教と瞑想に興味を持ち、精神面の修行として瞑想するようになったということです。まさに、キューバに芽吹いた侍魂ではないでしょうか。



2017年ハバナで行われた武道の演武会

キューバにおける居合道の始まり

“

居合道がキューバで知られるようになった当初は、ビデオを使って練習をしていたそうです。1998年に、無雙直傳英信流居合術の第二十一代宗家関口高明師範が、当時のキューバ空手道及び関連武術連盟ラミロ・チリノ会長の招きでキューバを訪問した際に、正式に居合道の教育が発足、キューバの剣道指導者達に居合道の指導法が教授されました。その後しばらく居合道は剣道協会の下で活動していましたが、2005年に関口高明師範がキューバに戻った際に、トウィ先生が直伝の弟子となり、無雙直傳英信流居合術高明塾のキューバ支部長に任命されました。そして、トウィ先生を代表に、剣道から独立したする居合道協会が発足されたのです。

「居合の本質はコミュニケーションであり、刀が描き表現するスピード、機敏さ、正確さ、そして美しさなのだ・・・」



2017年スペインのバレンシアで行われた関口師範のセミナー



2014年ハバナで行われた関口師範のセミナー

居合道とは？

「居合」とは、戦うことを想定していない場面での敵の襲撃に備えることです。「居合道」は、不意の対決に直面した時に、刀を抜き、相手に一撃を与えた後、刀を鞘に納めるまでの一連の動作を極めることを目指します。「関口師範は、居合の本質はコミュニケーションであり、刀が描き表現するスピード、機敏さ、正確さ、そして美しさなのだ」と言います。」と、トウィ先生は教えてくれました。トウィ先生に居合道の魅力について聞くと、「本物の刀と一体になること、刀を通して全てにつながる事です。つまり、ここに意識的に存在するということです。」と答えました。実際に刀を持ち、居合道をやってみないと、居合の世界の深さは理解できないと思えてきました。

「居合は絶対的な平穏から電光石火の動きを放ち、再び絶対的な平穏に戻ることを目指しています。

無と形、0と1のように。ある意味、私たちを取り巻く現実を表現していると思います。」トウィ先生は丁寧に説明を続けてくれました。

トウィ先生は、既に居合道の支部長の座を退いていますが、練習を欠かすことはありません。そして、黒澤明監督の映画や「座頭市」などの影響を受け、侍文化に憧れを抱いている多くのキューバ人のこともよく理解しています。一方で、トウィ先生は、刀はそれを理解し敬うことが大切だと忠告します。「映画を2〜3本、アニメを2〜3本見て、刀の使い方がわかると思うのは間違いです。刀は文化であり、日本です。私自身もまだその謎を解き明かせずにおり、何年もの継続的な練習を必要としています。」と謙虚に語りました。トウィ先生が人生の師でもあると語る、関口師範にインタビューしたところ、「セサル・トウィ剣士は最初の門人の一人で真面目に真摯に修練を努めて来られた剣士です」と答えました。

アーティスト セサル・トウィ

トウィ先生は、教育大学で芸術教育を専攻しましたが、同時に情報デザインの専門学校も卒業しています。現在は、キューバ国立芸術大学で講師として働く傍ら、水彩画のアーティストとしても活躍しており、国際水彩画協会のキューバ代表も務めています。トウィ先生の作品の多くはキューバの市街地にある一般的な家屋を題材としています。ただそこにある家や建物の影に差し込む日差しを描いているだけなのに、けたたましい日常に一瞬だけ訪れる、暑さと倦怠感の中にあるはかない静寂を表していることが理解できます。これらのトウィ先生の作品の中に、「絶対的な平穏」を見ることができるのは、先生が居合道に精通している知っている人にとっては、とても興味深く、ある意味当たり前といえます。「水彩画は、水による芸術的な表現です。現実世界の幻想的な描写です。紙のように壊れやすくはかない台の上に描かれる透明な蜃気楼なのです。」



トウィ先生は専門領域を深い声で語ってくれました。「たとえ私たちが、確固たる永遠の存在であると信じる努力をしても、注意深く見れば、人生も、そして私たち自身も、このようにはかないものなのです。」



トウィ先生の芸術家としての活動と武道の関係・影響について聞くと、「集中すること、今ここにいるということ（居合）」が同じだと答えました。トウィ先生は、作品、筆、作品を見る人、そしてアーティストは同じだと考えています。けれど、お互いを理解する必要がある、そのためにはコミュニケーションと、みんなが楽しい気分になれる理想的な調和を見つけることが不可欠といいます。自分自身と常に誠実に向き合っている、トウィ先生の真剣なまなざしの裏にある芸術と居合道が少し理解できました。

キューバ国立芸術大学の日本研究講座

トウィ先生は、20年以上前に設立され、長年関わってきたキューバ国立芸術大学の日本研究講座の講座長に、2021年に就任されました。コロナ・パンデミックの前は、日本大使館はじめ、様々な機関と協力し、日本人アーティストのレジデンス、書道や歌舞伎のセミナー、日本映画の上映などが開催されていました。今後の日本研究講座の展望について聞くと、「パンデミック以前の活動レベルに到達したいと考えています。この講座のビジビリティをもっと学生の間で高



2020年国立芸術大学における書道家浜野龍峰の書道セミナー

め、講座の内容や活動だけでなく、スペースなど、あらゆる面で成長する必要があると考えています。」という抱負を述べ、創設メンバーの方々の貢献についてもコメントしました。実際、トウィ先生は同講座内で武道に関するセミナーを受け持つほか、日本語や書道などのワークショップも再開しており、その他のプロジェクトの実施も模索しています。居合道の哲学のように、同講座も「そこに在る」のではなく、意識的に「ここに在る」道を進みだしたのではないのでしょうか。



在キューバ日本国大使館
広報文化班